



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第七十四号 (一日発行)
平成七年十一月一日

報恩講

渡辺

に参詣して

ハツ工

北海の古平風土物語 (四〇)

古平名所「偕楽園」

高橋源 五〇

この名勝地・古平公園『偕楽園』も、終戦後の農地改革によって大きな変革を迎えることになった。

耕地は小作人に解放され、残念、無念の極みである。公園も種々の事情や経緯があって、結局は農地に変わってしまったのである。伊山口金治さんから二十年余

陸地は難所ばかり (4)

時化はだんだん激しくなるばかりで、二人の藩士はついにふとんを被ってしまう始末である。乗っていたアイヌが一生懸命に権をかくが、波が高くて今にもくつがえるのではないかと思われるほどであった。その時後ろを見ると、数町遅れて走っていたソウヤ場所の支配人らが乗った船が、横倒しになり危なく見えたが沈没はまぬがれ、しばらくして岸に船を寄せ、陸に上がったのが見えた。

アイヌの《ことわざ世間ばなし集》から

こちらの船も岸に寄せようと思ったが、かなり沖を走っていたのでなかなか寄せられないでいると、アイヌがベウタンゲをあげる。「ベウタンゲ」というのは、何か異変が起こった時に声をたてることで、その声は憂いをもった大変悲しそうなものであった。すると、この声を聞きつけたアイヌが小屋から出て来て、浜辺へ向かって走り出した。そこへ船を着けようとしたが、波が高く海水が船の中まで入ってくる。そのうちひとりのアイヌが波をくぐって来て、船の中に縄を投げ入れようとした。

過日、お寺の年中行事である『宗祖聖人報恩講』にお友達と連れ立って参詣して来ました。九月二十三日の「秋分の日」

大きな財産」であり、「誇るべき文化財」を失ったのである。今これを、仮に復元するとすれば、その費用は十億円以上であるうと聞くのである。

山口金治さんの緑園を愛し、人々をも愛し続けた崇高な精神に接して、今は亡き山口金治さんのご霊前に、心から哀悼の意を捧げる次第であります。

(筆者は古平町出身で現在小樽市に在住、八十一歳)

そしてこの日の報恩講と、素晴らしい秋晴れに恵まれて心の和むお寺詣りでした。今年も元氣でお寺参りのできたことを心から嬉しく思っております。顧みるに、私もいつの間にかお寺参りをする年齢になっていました。亡母は今の私の年齢よりもまだ若い頃から、近所のおばあさんたちと連れ立っては、熱心に報恩講のお詣りをしていました。

私はいつも家の前で、亡母を見送っていたものでした。

今は時世も変わり、それについて服装もまた変わり、今では紋付きなどを着てお詣りする人はもう見かけなくなりました。

かくいう私も、粗末な服装で失礼をしています。これから百二十年余の伝統ある宝海寺の門信徒として、精進していかなければと思っております。

帰りは健康のためと、お友達にと、楽しくおしゃべりをしながら歩いて帰って来ました。

ぜひ来年もまた、健康で報恩講の参詣をできることを願っております。

入院二、三日で熱も下がり、

点滴と検査が続く毎日なので元
気なかつた。同室の先輩方にあ
れこれ面倒を見ていただいて助
かつた。加えて私の病状まで説
明してくれてお医者さんより分
かりやすかつた。聞けば泌尿科
三度目の入院とかで驚いた。余
裕ができて、全立腺なるものの
医書も読んで一寸ばかりの知識
も得た。まあ死ぬこともなかる
うと、医師、看護婦の言う通り
したがった。よく食べ、よく水
を飲んで排尿量を増やした。

同室の患者は私を入れて六人
六十五歳から八十一歳まででど

故郷を想ひ 福井孝平

なたも明るい善人ばかりで、新
入りの私は初年兵のつもりで敬
語を忘れず、みんなと仲良くや
ろうと努力した。元来が開放的
で世話好きなオッチョコチョイ
すぐに慣れて楽しく過ごせた。

病院食の味けなさには参った
が、だんだん慣れてきた。お見
舞いの差し入れもあって不自由
はなかつたが、ただチンチンか
ら管をいれて排尿するので、ど
こへ行くにも小便袋を下げてい
るのはかっこうよくなかつたが
それでも売店で買い物できるよ

うになった。

毎朝、六時に寺の鐘が鳴って
目が覚める。割合順応も早かつ
た。夜はおそろしく長く、小樽
の夜景を眺めては早く帰りたい
なあ——と、思わぬでもなかつ
た。それに隣の病室で誰が死
んだとか、がんの末期でどうの
こうのと身震いするような話も
耳に入る。このベットも何人の
患者が死んだのか、と思うと生
命のはかなさを感じる事があ
るが、自らを励まし、毎日を明
るく過ごすことを心がけたので
「福井さんおもしろい人」だど
か「元気な人」だとか、言われ

てまんざらでもなかつた。
廊下での運動も毎日欠かさず
五百歩数えてがんばった。食事
もガムシヤラにつめこみ、あま
り好きでなかつた梅干しやらっ
きよう、海苔の佃煮もずいぶん
と食べた。

いよいよ検査も迫りましたが
体調すこぶる良好なり。
コオロギの昼間く声のつながら
ず
患者食メロン出る日を楽しみに
病院の消灯早き夜長かな
虫を聞く病後の試歩を始めけり

もの、を大事に

便利な町の「修繕屋」さん

竹内 こと

昔は、ものを大事にするとい
うことを、親から教わりまし
た。何でもこわれたからといっ
て新しいものを買って来たので
は、いくら働いたところでたま
りません。どんなものでも修繕
すれば、そのものはまた生き返
って使えます。どんなもん買っ
て使えたいんではそれこそ『ざ
るに水』で、そこに修繕屋さん
の出番があつたのです。

道ばたで見かけるのが「鑄か
け屋」さんで、鉄鍋とか鉄びん
をなおす人です。以前はたき火
や薪ストーブが主だったので、
鍋の底が真っ黒になり、たわし
などでごしごしこすつたり、ま
た鉄ですからさびやすく、穴が
あいてしまいます。それを鉄で
うめて修繕するのです。
「桶屋」さんも何軒かありまし
た。洗い樽から米とぎ、

洗濯たらいと、洗面器
のほかは、今のよう
な金物や化学製品のもの
はありませんでした。
みんな木でしたから水
に弱く、ぬれていたり
湿っているとどうして

そこから腐ってきます。そうか
といつて乾き過ぎると継ぎ目が
すいて、水がザアザアもつてし
まったり、知らない間にタガが
はずれてしまつて、樽や桶がば
らばらになつてしまいます。木
のいたんだ所を取り替えたり、
タガをはめ替える、とこれでま
たりっぱに使えるのです。漬物
のシーズンは特に忙しかつたよ
うでした。

「くつ屋」さんもありました。
くつといえはほとんどがゴム靴
です。それも冬のコム長靴で、
新しいのはなかなか買えませ
んでしたから何回も何回も穴のあ
いたところを修理しては履いて
いたものです。昭和のはじめ頃
でも、コム長靴を履いているの
は裕福な家庭でした。冬にな
ると町の中の道路は馬の背のよ
うになり、歩いてい

も滑りやすく、それで
底に滑り止めを付けて
もらいますが、冬にな
るとくつ屋さんは忙し
くなります。学校の帰
りよく菅原くつ屋さん
に寄りました。



遙かなる故郷の思い出

[14]

鯨漁の歩方(ぶかた)の話 (3)

榎 義我 春

昭和二十四年、今までの不漁を挽回し「今年こそは——」という意気込みで、また歩方をやることになったが、竹本漁場の若親方は私たちの意見を取り入れて、前浜に見切りをつけ、群来村の厚苦の漁場に網を入れることになった。

ここは昔から千石場所といわれていた所で、竹本漁場が権利を持っていた。いよいよこれ度三度目の挑戦である。

厚苦前の海は、磯や底石までびっしり海藻が生えていて、今年こそ鯨が産卵に来そうな気がする。なにか千葉先生の説を信じてみたい。

漁期が始まって間も無い、あの海の穏やかな日の夜中の十二時頃であった。起し船で寝ていたら、木村船頭から「みんな起きれ！」という声がかかった。急いで起きて海を見たが、外は真っ暗やみで海はとろ風だった。海の上をすかして見ると、網の五十米くらいの沖合いに幅三十米、長さ百米ほどの帯状に海が白くなっている。それが夜

目にもはつきりと見える。「あれは何ですか」とちようちん屋に聞いたら、

「鯨の群れだ」という。二十年余り鯨の歩方をやっているが初めてだといっていた。まるで海の中に大河を見ているようである。鯨の大群は止まったまま動かない。蛇行するようにゆらゆらと動いているだけである。ものすごいものを見てしまった。なぜ止まっているのか不思議である。松田の彦さんの話だと、

「鯨の群の先頭に、えびす鯨」といふ頭の赤いリーダーが何匹かいて、それが動き出すと一斉に動くのだ」といふ。

「その、えびす鯨が、俺たちの方に向かって動いてくれ」と、祈るような気持ちで見えていたら、急に先頭の群れが動き出した。すると今までゆらゆらとゆれ動いていた鯨の群れの動きがピタリと止み、一斉に走り出した。先頭の群れがわらで作った手網に当たると沖の方に向きを変え、まるで建網の入口に突進するように向かって来た。

海の中から「ザワザワ、ゴー」といったような音が聞こえる。鯨の大群が続々と網の入口から押し合いへし合いしながら入ってくる。群れは網の中をぐるぐる回りながら、めすは網の中で産卵を始めた。その後を追うようにしておすが白子をかけていく。その様子が石油ランプの明かりでよく見える。

前田船頭が網の入口を閉めると、網の中の鯨はそれこそ袋の中のねずみである。「オーコイ オースコイ——」の威勢のいいかけ声で、いよいよ網起しが始まった。鯨が集団で突っ込んでくると、網を引く方もヘトヘトになってしまふ。棹船と起し船の間隔がやっと

「7日はこんな日」北海道余市市高等学校から独立

北海道古平高等学校の誕生

北海道古平高等学校の誕生

せばまり、棹船への追い込みもなった。「ドットコセーノ コラエー」から始まり、

「アラアラドッコイ ヨーイト コ ヨイトコナー」
「ヤンサーノ ドッコオイ」
棹船への追い込みが終わった。いい気分だ——。これが鯨漁の醍醐味(だいごみ)かも知れない。三年目にしてようやく悲願達成である。千葉先生のお説のとおりであった。三半船八杯半で、古平一の漁をした。

五月のはじめ、漁の切り上げと同時に古巢の東京へ出たが、それ以後は鯨は獲れなかったと聞いている。あれが最後の幻の鯨だったかもしれない。

戦後間もない昭和二十三年十月、町民の熱望により余市高等学校古平分校(夜間定時制)として創設され、十一月十五日、六十七名の新入生を迎えて入学式が行われた。

その後、分離独立への機運が高まり、二十七年十月一日、北海道古平高等学校と校名を改称して独立した。校舎は中学校に間借りする不便さはあったが、生徒たちは若々しい意欲に溢れていた。当時、学校でよく歌わっていたものに、**「豪気節」**がある。終わりとせ、おわり名古屋は城でもつ、古高生徒は意気でもつ、そいちゃ豪気だねえ

と温泉別登 兵衛半岡田

〔上〕

―古い文書に見る― 登別温泉の開発と岡田家

今から十五年前になりますが、昭和五十五年一月十四日の北海道新聞にこんな記事が載っていました。覚えておられるでしょうか。

『登別温泉びっくり』

開祖は岡田半兵衛（近江商人）だった

登別温泉の開祖は、現在の第一滝本館の創始者である滝本金蔵というのがこれまでの説でしたが、登別温泉株式会社専務の岩原秀夫さんが「本当の開祖は岡田半兵衛」という新説を出したのです。

■今までもあった岡田家説

この新聞記事の四十年前の昭和十年五月九日、初代岡田弥三右衛門の出身地である滋賀県近江八幡町（現在の近江八幡市）で発行されていた『月刊太湖』にも、

「北海道登別温泉の

真の開発者―八幡岡田家―

という標題で、同じような記事が載っています。

■『登別の歴史から』

それでは、これまで一般的に「開祖は滝本金蔵である」といわれていたといいますが、そのことを『登別の歴史・やさしい史話』で見てください。

「安政五年（一八五八）四月二十三日、箱館奉行村垣淡路守範らが細い道を踏んでこの地を視察したところ、幌別場所請負人

岡田半兵衛の建てた小屋が一棟あり、なお工事中で、湯治は川の中である、と日記に記載してあるという。

同年、武蔵国児玉郡本庄の人滝本金蔵という者が、箱館奉行役人新井小一郎の募集に応じ、山越内場所（八雲郡山越）長万部に移住し、数か月の後、金蔵は登別の地に転居。場所請負人（岡田半兵衛）の許可を受けて温泉場に入り湯守となる。当時中秋（陰暦八月、現・九月）以降は、サケが登別川を上るのに害になるからとして入浴を禁じたという。

明治維新の後、幌別役所から湯守であることを許可され、登別村（登別本町）に旅人宿を開いたが、年を追って浴客が増加するに従い、温泉浴場の経営に

力を尽くし、明治二十年道路を開削し、漸次発展して今日に至り

（大正七年、登別温泉が自然の名勝地として国指定の候補に上った時の書類に記載のもの）

■『月刊太湖』から

（函館師範学校白山友正教諭の文からとして）

「登別温泉は、武蔵本庄の人滝本金蔵が、胆振国長万部に安政五年に移住して来たが、たまたま妻女が病気になった。同年八月二十三日夜、霊夢によつてこれを発見。小屋を建てて妻女が毎日入浴したところ、薬効があらわれ間もなく快癒した。ここに夫妻が協力して荒地を切り開いて湯小屋を建設、次第にその名が伝わり大いに繁栄をした」これによれば、登別温泉を発見し、温泉場を建てたのは滝本金蔵ということになります。

■岡田家の文書から

岡田家十一代・正庸（明治になつて正期と改名）が安政四年に関係するところがあります。「この場所、嘉永二年酉（一八四九）五月より岡田請負、今までの請負は田付、西川の兩人、以後、辰年（安政三年）一八五六）まで岡田、同年四月から井筒屋久右衛門の請け負うところ

となつたが、巳年（安政四年一八五七）四月になり、同人仕入れ万端不行届ということ、四月にまた、岡田半兵衛（支配人）が召し出され、再度、請負を仰せつけられた」このようなことで安政四年から慶応二年まで、岡田家の場所請負が続きました。

■最上徳内「蝦夷草紙」
さらに時代をさかのぼつて寛政二年（一七九〇）、当時の蝦夷地を探険した最上徳内の書いた本を見ると、

「東蝦夷地のホロベツ場所の内、ノボリベツ（ヌブル・ベツ）水の色の濃い川（ヌブル・ベツ）という河がある。この河を上つて行くと四、五里ほどの奥に硫黄山があつて、常に火が燃えていて消えることがなく、信州の浅間山のようなものである。それでその辺一帯には温泉がわき出て、それが流れて来て集まり、一つの川になつてこのノボリベツ河に流れて来ている」

と、自然の様子を書いていますが、人家があつたかどうかはこれでは分かりません。

これより五十五年あとの弘化二年（一八四五）、有名な松浦武四郎もここに来ましたが、後の本に「人家もなかりしが：：：」と書いています。